

たり

宮城県亘理町は、全国でも有数のいちご産地でした。見渡す限りに並んでいたビニールハウスは、津波で跡形もなく流されました。被災農家では、新たに農事組合法人マイファーム亘理協同組合（以下、マイファーム亘理）を設立し、農業の復興をめざしています。グリーンコープは共生地域創造財団とともに、加工用トマトの栽培を通してマイファーム亘理と連帯しています。

加工用トマトの収穫と復興に向かう生産者の様子を伝えます。



斎藤さん



マイファーム亘理の女性たち



加工用トマトは支柱を立てずつくる。収穫作業は地面に這いつくばり、枝をかき分けながら行う重労働

「1年前の今頃はこの辺りは草がぼうぼう。お先真っ暗で何もしたくない心境でした」と生産者の一人、斎藤正一さんは語った。秋ごろから農業復興に向けて共生地域創造財団と一緒に取り組み、3月には近隣の農家のみなさんとマイファーム亘理を設立しました。

津波の影響で、井戸水の塩分濃度が高く、いちご栽培はできなかったため、塩害に強いトマトをつくることにした。

長年いちごを手広く栽培



1年前は瓦礫と雑草で覆われていたところに、今では6ヘクタールのトマト畑が広がる。収穫時期は10~20人が作業を行っている

してきました。生産者にとって、トマトづくりは初めて。長野のグリーンコープのジュース用（加工用）トマトの生産者の指導を受けた。

地域の人たちのつながりに、新たに加わったグリーンコープや共生地域創造財団とのつながり。「グリーンコープやボランティアの人たちが『また来ます』『トマト商品ができるがったら絶対買うよ』と言つてくれるのが何より嬉しい」と言ふ。

いよいよ収穫期を迎え、トマトはケチャップやジュースや加工品原料になるために出荷される。「亘理のトマトでつくった商品を、仮設住宅に一人で暮らす人も『引きこもりのような状態になり、息子たちは自殺の心配までしました。そんなときに、ご近所さんの斎藤さんに『トマトづく

りをするから、いつしょにやらないか』と声をかけられました。こうやってみんなで働くことがあります」と笑顔で語った。

トマトの収穫はたくさんの人手を必要とし、ボランティアに助けられている。その一方で、被災者の雇用にもつながっている。今年の夏は特に暑くて収穫作業は大変だが、「みんなで働くことが嬉しい」と生産者のみなさんには日々に語る。その中には津波で夫を亡くし、仮設住宅に一人で暮らす人も。「引きこもりのような状態になり、息子たちは自殺の心配までしました。そんなときに、ご近所さんの斎藤さんに『トマトづく

りをするから、いつしょにやらないか』と声をかけられました。こうやってみんなで働くことがあります」と笑顔で語った。

トマトはケチャップやジュースや加工品原料になるために出荷される。「亘理のトマトでつくった商品を、仮設住宅に一人で暮らす人も『引きこもりのような状態になり、息子たちは自殺の心配までしました。そんなときに、ご近所さんの斎藤さんに『トマトづく



収穫されたトマトは、長野県にあるグリーンコープ指定の加工用トマト加工場に運ばれる